

## 盲目の詩人加藤勘助の生涯（二）

古川 敬

（会員 佐伯市鶴岡町）

第三章 武者小路実篤との出会い そして新しき村へと

木下利玄は勘助に短歌の指導をすることともに、文壇、とりわけ自身が属する白樺派の作家たちのことを話して聞かせた。勘助が武者小路実篤の作品が好きだと知ると利玄は大変喜び、とりわけ実篤のことをつぶさに話して聞かせた。

武者小路実篤はこの時すでに白樺派の作家として日本中にその名を知られていた。利玄は勘助に、実篤は作家という仕事に飽きたらず、実篤が思う人間らしい生活の一つの運動体として作り上げたいという信念から、理想郷「新しき村」の設立を目指していることを教えた。

勘助はこの実篤の提唱する「新しき村」の話聞き激し

く心を揺すぶられた。直ぐにでもできることなら自分も「新しき村」に参加したいと利玄に申し出た。利玄は真剣に訴える勘助の姿に心を動かされ、実篤に勘助を紹介する。

実篤は後に勘助との出会いを次のように懐かしんでいる。

加藤君を始めて知ったのはその時分別府に行っていた木下からの手紙によつてだった。自分が丁度新しき村の仕事を始めやうとしてゐた時だ。

木下から加藤君と云ふ若い、いい人が居て、村の仕事に同感し、村の仕事を一緒にしたがつてゐることを知らせてきた。そして加藤君からも手紙をもらった。

木下が大変信用しているので、僕も信用した。

当時の勘助の実篤への思い入れは相当なものであった。

私はこれまで誰れにも話さなかつたけれど、若し「新しき村」がもう一年遅く出来ていたら、我孫子の武者兄の処に行つていたかも知れない。これは私だけの心で決

心していたことであつた。しかし今の村が出来たため私は其の必要が無かつた。

と後に書いている。

こうして、大正6年、勘助の人生に最も大きな影響を与えた武者小路実篤と出会うこととなる。利玄との出会いそして武者小路実篤との出会いは勘助にとって天からの定めのように感じられたのかもしれない。そして実篤が提唱する「新しき村」への参加は自分の運命だと思つたのに違いない。

一方実篤にとつても勘助との出会いはやはり運命であつた。

大正7年実篤は「新しき村」の実現のため、村の建設場所の選定に入る。当初候補地として有力だつたのは日光の奥や信州の高原であつたが、勘助が実篤に宛てた一通の手紙によって新しき村の候補地は一転日向に傾く。

実篤の手記によると大正7年7月18日「大分県佐伯の会員、加藤勘助君から日向についてのいい便りがあつた」と勘助からの手紙を受け取つた事を書いている。そして、

その手紙を読んだその日である、実篤は「日向と云う名が気に入る、日向の土地の話聞いて気に入る、冬も働けるのも気に入る、日本に最初に起こつた土地だといふので気に入つた。」と書いて一気に入「新しき村」の最終候補地を宮崎県の日向地方に定めた。

新しき村の会員になつてまだ間もない勘助、まだ顔も見たことも声を聞いたこともない勘助からのただ一通の手紙で実篤は自身の夢である新しき村の候補地を日向と定める。これもまた実篤と勘助の運命であつたのだろう。候補地を日向と定めると直ぐに、大正7年武者小路実篤はその地に新しき村を建設しようと同志二人を伴い東京を出発する。九州に入ると実篤一行は、東のルートつまり日豊線を乗り継ぎ九州を南下した。日向へは既に鉄道網が整備されている熊本を経由して向かうことが当時の一般的なルートであつた。

なぜその熊本經由のルートを使わずわざわざ遠回りして日向に向かうのか、それは佐伯で勘助と合流するためであつた。

勘助はこの日向に新しき村の地を求める探索の旅になんとしても参加したいと実篤に訴えていた。実篤にして

みれば、新しき村を日向に決めたのは勘助からの手紙に心を動かされたためであり、その思いを受け止めるのは何のためらいもなかった。

大正7年10月8日実篤ら三人は福岡から一路佐伯に向かう。勘助は実篤一行を津久見駅まで迎えに行き共に佐伯に入る。

木下利玄と同じ梅屋に宿泊した一行は佐伯から海路ととろろ土々呂へと向かうこととなる。それは昨年利玄が南九州の旅に向かったのと同じ航路であった。勘助はこの一行の一員に加わり船に乗り込む。

実篤と行動を共にしようとすると勘助の強い意志に母も今度ばかりは反対することはできなかった。もちろん母にとつては勘助の健康が大きな気がかりではあったであろうが、実篤から自分の目指す新しき村の建設には勘助の力が是非とも必要であるとの言葉を聞き領かざるを得なかった。

むしろ、わざわざ佐伯まで足を運んでくれた実篤の人の柄に触れて大いに感動し、この日から、勘助の家は兄來作が代表者の新しき村佐伯支部となり物心両面で勘助や新しき村を支援していくこととなる。

こうして新しき村という新天地を求めて佐伯港を出発、意気揚々と海路日向に向かった実篤一行であった。

しかし冷静に考えればこの旅は非常に無謀なもの、荒唐無稽なものであった。土々呂についた一行はその日から「日向」と云う漠然とした地域をさまようこととなる。交通事情が現代とは全く違ひその行程のほとんどは徒歩か運が良ければ馬車という過酷なものであった。

その上、土地を見つける方法も、土々呂から美々津へ向かい村々の役場に飛び込み、自分たちの理想とする土地はないかと直談判する無鉄砲なものであった。東京から突然やってきた怪しげな男たちに村人や役人は「偽札作りをやる集団ではないか」とか「タヌキ皮でも獲るのではないか」とか「西郷隆盛のような拳兵を企んでいるのではないか」とかの噂が広まり、猜疑心からまともに交渉をしてくれる人はいなかった。一行の旅はこのような困難を繰り返しながら小林まで続く。

勘助は旅の前半まではこの過酷な旅についていけたが、旅も一月近くになるとついに体調を壊してしまふ。従来から弱かった目が変調をきたし片目の視力がほとんど無くなってしまう。このまま旅を続けても実篤に迷惑が

かかると思い勘助は断腸の思いで新しき村踏査の旅から  
離脱せざるを得なかった。勘助は後ろ髪をひかれる思い  
で、実篤一行の許もとを去る。

20代も後半になってようやく自分の進むべき道を見つ  
けた勘助にとって、大きな希望を持って臨んだ新しき村  
の土地探しであった。自分の体の弱さをどれだけ恨んだ  
ことであろうか。

それでもこの時点では勘助の心は折れていなかった。  
勘助は、自分の人生をかけるにふさわしいものをやっ  
手に入れたのである。勘助はなんとか眼病を克服し一刻  
も早く自分も新しき村の一員に復帰したいその一念であ  
った。

一方実篤はこの時ようやく宮崎県児湯郡木城町こぎょうに土地  
を見つけ、大正7年11月新しき村の開村にこぎつける。こ  
の知らせを聞き、勘助は一日でも早く目を治し新しき村  
に入りたいと思い、母や兄に目の治療を受けさせてもら  
いたいと懇願する。母も兄も勘助の病が回復することに  
異論はなかった。勘助は早速家族の勧めで九州ではその  
道の権威である福岡の九大病院で診察を受けるべく福岡  
に向かう。

しかし、勘助に再び試練が襲う、視力の回復を期して九  
大病院に入院し、手術を受けた勘助であったが、結果は思  
わしくなかった。勘助はついに完全に失明してしまふ。

新しき村こそが自分の生きる道だと心に決めていた勘助  
は失意のどん底に突き落とされてしまふ。自暴自棄に陥  
った勘助は「肉眼を持たない自分は村の人として労働の  
仕事はできない」とついに新しき村に入村することを断  
念してしまふ。

人生の方向を失った勘助はこの時信仰の道を選ぶ。も  
う神に自分の人生を委ねる他ないと考えたのであろう。  
大正九年、勘助は聾啞学校から神学校に進み信仰の人と  
なることを決意していた。

実篤は勘助の目が回復し新しき村に入村できることを  
心から願っていた。それは新しき村の土地探しの過酷な  
旅が勘助の目を悪くしてしまつたという自責の念も少な  
からずあつたが、それよりもそのひたむきな純粋な勘助  
の人柄に触れて自分の良き理解者としてともに新しき村  
で生活したいという気持ちが大きかつた。光を失つた勘  
助が信仰の道に生きることを知り、それをやむを得ない  
ことと認めながらも、勘助を新しき村へ招きたいという

気持ちには消えなかつた。

大正9年5月、実篤は勘助に手紙を書く。それは勘助に新しき村へ入って欲しいという内容であつた。勘助は実篤からの手紙を読んで大きく心が揺れた。「武者先生から来たお葉書を読んで興奮した。不思議な決心が一分のすきもない速度と力を持って電光石火のように自分をかすめさつた」と後に書いている。

勘助は実篤の温かい申し出に、すぐにでも新しき村に飛んで行きたい思いに駆られたことであらう。しかし、失明した自分が入村することは村の人々に迷惑がかかるのではないかと逡巡する気持ちの方が大きく心を占めていた。

実篤はそんな勘助の気持ちを察し、旅先から日向へ帰る途中で福岡に下車、福岡に住む勘助を訪れ面と向かつて説得する。「君は肉眼はないが心眼を持っているから心配せずに村に来てほしい」福岡に三日間滞在し勘助を説得し続けた。

実篤の熱い言葉に、ついに勘助は入村を決意する。

その日実篤は勘助を伴い新しき村に帰つてきた。勘助には三年ぶりの日向であり、新しき村の土を初めて踏ん

だ。勘助は実篤から手を引かれ入村した日の感動を次のように書いている。

高城町から村へ行く長い山路を、自分は馬に乗せられたり兄弟姉妹に助けられたりして行つた、石河内から城へ行く舟で渡る時、一人の兄弟は自分の手をとつて小丸川の水に浸さした。此方の岸からむこう対の岸に張られた大きな綱のあることも知つた。

城に上つた。一人の姉妹が「よく入らつしゃいました」と言つて迎へてくれた。ある姉妹は何にも言はないで強く自分の手を握つた、自分は涙ぐましい気持ちになつた。自分には誰の顔も分らない。心と心が握手する。真心と真心とが握手する。

この二三年、自分は怖ろしく暗い運命の道を歩いて来た。自分は或時は絶望に近い思ひをした。神に背き神を離れんとしたことさへあつた。しかし、自分は生きてみてよかつたと思つた。殆ど耐へがたい程に思はれたあの苦しき淋しさも、今の自分の幸福に較べたらそれは余りに安価であつたことに気付いた。

この日から勘助の「新しき村」での生活が始まる。勘助は入村の翌日から上手に茶を摘み、茶もみにも参加して人びとを驚かせた。実篤はその代表作「一人の男」の中に、勘助のことを書いている。

加藤の家は下の段のわきにあり、僕の家は上の段にあり、それも一番はずれにあった。

従って加藤が僕の家に来るのには相当歩かなければならなかった。

いつからか僕は覚えていないが、僕が朝の仕事、原稿を書き終えて少したつと、十時半頃だったと思うが、聞きなれた特別な足音が聞えてくるのが、ならわしになった。その足音の主は加藤勘助であった。

僕は喜んで加藤を迎え、それからいろいろの話をするのだ。人生の話、文学の話、村の話、人々の噂、とりとめのない話が多く、記憶に残っている話はなかったが、それが日課のようになっていた事を覚えている。加藤は真面目な話しかしない質だったし、僕も真面目な話きり出来ない質だから、僕達の話は、他の人が聞いたら、よくもあきずにつまらぬ話が出来ると思つたらう

というような話だが、二人はそれで満足し、しんみり語り合うのだった。そして一時間ほど話して、昼飯前に帰っていった。

加藤は目が見えないので、目が見えないでも出来る仕事を、馬小屋の下の日あたりのいいところで、根気よくしていた姿も思い出す。加藤の気持を一番よくあらわしているのは彼のこの詩である。

今日も私は坂の上で少年と一緒に仕事をする

少年は素直で単純だ

さうして信じ易い

坂に添った崖に生えた木を

前の日に他の兄弟達が伐り払つた

少年はそれを集めて私の所に持つて来る

私は鋸をもつてそれを薪になるやうに

短く挽いてゆく

私達は疲れると休んだ

さうして少年は私に話しかけた

ロダンやトルストイのことを聞かれた

ムキで熱心で

少年らしい純粹さを私は愛した

心に喜びの微笑をしながら私も話した

涼しい風が汗ばんだ顔を吹いて通る

鶯が時々思ひ出したやうに鳴く

初夏のやうな感じのする日だ

(一九三三、四、六)

一方で実篤にとつて勘助は新しき村の運営にとつても欠かせない人物であつた。新しき村はその場所探しから無計画なものであつたが、村の運営も開村当初は内紛が続いていた。全く農業をしたこともない若者に「さあ鋤を持とう畑を耕そうと」言つてもどうしていいかわからない状態であつた。畑にやみくもに肥料を入れ作物を枯らしてしまふこともあつた。

入村した若者たちはの多くは農業をしながら芸術活動をやるといふ村の理念に共感してやつてきていた。そのため、労働を第一に考える人と芸術を第一に考える人との衝突が生じてしまふ。また、現金収入と言へば実篤の原稿料がほとんどで「ペン一本で箸五〇本を養う」と新聞記者から擲<sup>や</sup>擲<sup>ゆ</sup>されるほど設立したばかりの新しき村の経済

状況は脆弱であつた。勘助が入村したのは開村から二年後の村の形がまだ出来上がつていないそんな時であつた。

その頃のことを実篤は述懐している。

加藤君は労働の方は勿論一人前とはゆかなかつたしかし村のなかでは年上のほうで、頭のしつかりしている点では図抜けていた。それで何か相談がある時は、加藤君はしつかりしていた。村に経済の危機が来た時、加藤君は盲目の身で会計を引き受けてくれた。当時村で一番年上の村木さんが加藤君を助けてくれた。加藤君がしつかりしていてくれたのでその危機は無事に過ぎた。

勘助が入村した後、農業も少しずつ軌道に乗り、経済は実篤の原稿料や村外の支援者に大きく頼つてはいるものの、会計としての勘助の手腕により、村の形がしつかりとしたものになつてきたことが伺える。

そんな時、勘助は佐伯新聞に「新しき村より」と題し文を寄稿する。

これは新しき村の理念や新しき村での出来事を佐伯の人々に紹介するものであった。この「新しき村より」の寄稿は勤助が昭和四年亡くなる直前まで続いている。「新しき村より」の行間からは勤助のふると佐伯への想いと、阿南卓との深いきずなが浮かび上がってくる。

当時文壇の著名作家武者小路実篤が企てた「新しき村」は全国紙でも興味を持って取り上げられていたのでこの勤助の「新しき村より」は佐伯の読者、とりわけ文学に興味を持つ若者に熱心に読まれた。「新しき村より」を読んだ佐伯の若者が武者小路実篤に会いたい、加藤勤助に会いたいと新しき村を訪れた。勤助はそんな若者たちを歓迎し、実篤や村人との交流を取り持った。

佐伯を代表する歌人の一人高林長衛ちやうえい氏の遺稿集「新しき村」に勤助や実篤との出会いが書かれている。

倉の間に胸せまりたり長持のあわひに坐りせむ術知らず

こつそり倉の二階から着物を取出し、兼ての念願通り新らしき村へ行く事にした。

今の港即ち葛から汽船に乗った。

さて着いた所が細島港、それから高鍋の馬車屋の二階に一泊した。

のみしらみ馬の尿する枕もと

芭蕉の句を思ひ出す様なきたない馬臭いうまやの二階だった。高城までその家の馬車で、山越えして木城の石河内、それから小丸川に張った綱をたぐって箱みた様な舟で、字域まじの新らしき村に着いたのだが佐伯出身の加藤勤助氏の許に身を寄せた。

加藤さんの家は食堂から野菽の生ひ茂ったせまい徑を下った川べりにあった。小丸川のせせらぎが枕にひびいて又一つには無断家出の自責や寂しさも手傳つて寝つかれなかった。

武者先生にも紹介して戴いて暫く村に置いて下さることになった。加藤さんは盲目の詩人だった。夏だったので川の水際にお連れして加藤さんに流れに手をつけさせたりした。或時は詩を讀んであげたり、点字で書いた詩を文字に写す御手傳ひもした。聖書を点字に写すことも加藤さんの日課だった。あの高僧の様な温容と詩人らしい風格とを今でも懐かしく思い出す。

食堂にはオルガンもあり、ミレーの晩鐘や種蒔まく人



の複製や椿貞雄の絵がかかかけて居た事を記憶している  
食堂はクラブ兼公会堂だった。

或時加藤さんに伴いて武者小路先生の家に行つた。

丁度縁先で先生は網をすいてゐられた。川魚を漁る網  
をつくるのだと、僕が網元の息子であり村に来る迄網  
引きだった事を知つていられるので「君網すいて呉れ  
ないか」と言はれた。僕は漁師の癖に網すく術を知らな  
かった。先生は有名な小説家で公家華族けいさくであり乍ら網  
をすかれてゐた。

この時程漁師に不真面目だった事を悔いた事はない  
顔が赤くなつた。穴にでも入りたかつた。日向の山奥で  
網のすけない恥をかかうとは御釈迦様でも御存知なか  
つたらう。先生も網をすきあげて魚を漁つたか否か僕  
も知らない。

一ヶ月後に家兄に連れ戻された。その時お別れに先  
生のお目にかかつた時一行の詩を書いて下さつた。

よき花を咲かせよよき果を結べ

今はその詩稿も失うたが頭に鮮やかに残っている。

佐伯の若者にとつて勤助の人柄に触れ、さらに武者小

路実篤という著名な作家にこうして会うことができるこ  
とは正に夢のような時間であつたことだろう。

勤助は新しき村に入村後、短歌から詩作の世界へと表  
現の場を変えていく。村での労働を終えると余暇は詩作  
に没頭した。勤助は新しき村や白樺派が発行する文芸誌  
に次々に自作の詩や随筆を発表する。

勤助の詩に対する実篤の思いが書かれている。

昨日村の加藤勤助君が詩をかいてもつて来た。同君  
は自分の知れる範囲で日本唯一の盲目の詩人である。  
同君は今迄にもよく詩をかいていたが、この頃めきめ  
きめきとよくなつたやうに思ふ。一つ二つお目にか  
けることは読者もよろこんでくれると思ふ。

夕暮

夕暮は

小鳥の声も静かである

かゝる時

私は 人野に立つのが好きである

あたりの山も木立も

それを包む蒼然たる色彩も

光りを失なつた私の瞳にはうつらないが

それだけにまた

天地の幽久な感じが神秘なものに思はれる。

あるかなきかの風の音にも

私の聴覚はふるひ

じつとそれに聞き入る。

この時、世界は一人のもの、専有に帰し

私は正にその王者である。

お、この一時

私は自然を愛する

### 麦

夕暮の慕はしさ

私は畑の中の道を行く

風が出て

さやさよとくと麦は快よい音をたてる

私は佇んで手を伸べ

出揃つたばかりの穂並の上を撫でて見る

つぶらな多くの実が堅く抱き合つて

一つの穂を成してゐる

その成長の感じの強さ

私は見えない者の力に心を惹かれる。

私は盲目の男である

自分は加藤君の詩を五六年見てみたが、公けにほめていいとはまだ思はずに來た。僕は友人だからと云つてほめる自信が出来るまではほめたことがないから。

しかしもう公おみぎにほめていい時が來たと思ふ。

日本の盲目書詩人として加藤君は世間から尊敬されていい時が來たと思ふ。

自分はいつか加藤君の詩集を出したく思っている。

実篤から文学の力を認められ充実した日々を送っていた勘助、そんな時であつた勘助が悲しみに打ちひしがれることが起きる。

それは、新しき村で知り合い生活を共にするようにな

つた津久見市出身の恋人石井静枝の死であった。静枝は結核を患い、勘助の元を去り故郷津久見でこの世を去る。

愛する者の死を経験し、勘助の詩は一層透明感を増し、読む人の心を揺さぶった。新しき村の村民の間でも勘助の詩を新しき村や白樺派の文芸誌だけではなく、広く日本中に紹介したいという機運が盛り上がっていた。

ところが、昭和4年8月29日、勘助は急性肺炎のため突然この世を去ってしまう。

勘助の死に至る経過を新しき村の友人たちの日記でたどると、勘助の死がいかに突然なことであつたかがうかがい知れる。

昭和4年

8月26日

加藤君病気になる、昼から休んで看病に行く。

40度3分。

8月27日

熱は引かず39度と40度の間を上下している。

肺炎ならん。この夜徹夜して看護する。来診を頼む。

8月28日

朝3時頃、余りひどいので川島君を起こして来る。明朝誰かに頼み電報することにする。

熱が三十九度から四十度二三分もあり、脈拍も百二十ある。加藤君の郷里に病状を知らせる。

十時ごろ佐伯から加藤君の兄さんが見えられた。声をかけても通じないのはお気の毒だった。

もし来てもらう人があつたら来てもらったほうがいいと医者言葉があつた。

來作さんはいつ頃が危険なのでしょうかと問われていた。今夜か明朝くらいがそれでしょうと言っておられた。

「死ぬかもしれないのだ」自分は何となく「病氣は治るもの」と思っていた。大変なことだ。

8月29日

農事に働いていた人達も、松本等を始め大勢寄っていた。カンフルの注射が行はれると、病む人の体ががくがくと動いた。

元気がつくのだろうと期待した。しかしそうは行かなかった。

加藤君の顔色は次第に褪せつつあった。

そして病者の呼吸はやがて静かになった。

細い手は來作さんの跪いた手の中にもたれていたまま。午後一時半 加藤君逝く

勘助は発病してからわずか4日で帰らぬ人となった。

兄來作は勘助の病の連絡を受け28日新しき村に着く。その時にはもう声をかけても反応がない状態であった。

8月29日、必死の看護のいかにもなく、兄來作や新しき村の人々に見守られながら勘助は永眠する。勘助38歳のあまりに早い死であった。

この頃村を出ていた実篤は勘助の死の知らせを受けると非常に驚き落胆した。実篤は新しき村で発行されていた新しく村通信の号外を発行し勘助を追悼することを提案し、昭和4年10月9日 新しき村通信 加藤勘助兄追悼号が発行される。

この追悼号は8ページにも及び、実篤を始め友人の倉田百三や千家元麿、そして多くの新しき村の仲間が勘助との予期せぬ別れを悲しむ文を寄せている。

実篤はその中で勘助の新しき村への情熱に感謝するとともに勘助の詩集を是非出したいと語っている。勘助の詩人としての才能を認めこれから盲目の詩人加藤勘助が大きく羽ばたくことを期待していた実篤にとつて勘助の死はあまりにも早く、痛恨の極みであったのだろう。

勘助の詩集を出したいという実篤の強い意志を受けて、新しき村出版部は昭和5年5月1日「加藤勘助詩集」を刊行する。それは加藤勘助が生きていれば39回目の誕生日でもあった。

この「加藤勘助詩集」とともに勘助の名前は今でも新しき村の人々の間で語り継がれている。現在も「日向新しき村」を守る松田省吾さんが「加藤勘助は村の宝として今もみんなの心の中に生きているのです」という言葉が、勘助のこの新しき村で過ごした人生を物語っている。

勘助の死の枕辺にあった点字の書き残しをたどると勘助が記した最後の詩が浮かび上がってきた。それは自分の人生が終わりを迎えているのかもしれないと感じていたかのようなある種の「予感」を感じさせる静かなものであった。

こほろぎは淋しいが秋になくはならない  
淋しい人間も

この世に生きていなくてはならないように  
そうしてそれらは美しい

花は赤や紫だけが美しいのではなくて

黄色いのも白いのもまけずに美しい

そうしてみんなが美しい

今日はずいぶん涼しく秋らしい

佐伯の病人のことをときどき思ふ

遠い所に居て病気の人のことを思うのは  
こころぼそい

誰がいつどんな病気になるかもしれないなど思うと

淋しい

仏教的な考えに心ひかれる

この秋はあまりに感じがある

何かにふれるのが怖いような気がする

今日もひとり秋風をきく

幾たびもの試練に会いながらも決して人生を投げ出す  
ことのなかつた加藤勘助は、彼を愛する家族や阿南卓あみななかし木  
下利玄そして武者小路実篤に出会うことで一歩ずつ人生  
の階段を上っていった。

38歳というあまりに短い勘助の人生であつたが、その  
一生は春夏秋冬波乱に富んだものであつた。勘助は人生  
の最後を新しき村という安住の地を得て、師と仰ぐ実篤  
と共に安らいだ気持ちで日々を送り、そしてその地でこ  
の世を去つた。

実篤は後に「勘助の人生の底には常に悲しさが漂つて  
いた」と述べている。この実篤が言う悲しさは決して哀れ  
を誘う悲しさではなく、生きとし生けるものすべてが抱  
える命の儚さへの思いであろう。勘助の紡ぎだす言葉か  
らもそれを感じ取ることができる。

加藤勘助その名前は戦国武将のように厳ついが、その  
実は自然のうつろいに身を震わせる心優しき盲目の詩人  
であつた。

(了)